



新年礼拝説教 — 2016年1月1日

たとえ嵐に遭おうとも

聖書 マタイによる福音書 8章 23～27節

武田 真治

## 1、二つの船旅

昨年の礼拝では三年に渡り読み進めて来ました「使徒言行録」を終えることができました。神様のお守りと皆様の忍耐に支えられた結果でした。感謝します。

その使徒言行録の終わりの部分は、パウロのローマに向かう船旅の様子でした。その折の説教で触れましたように、「船旅」は私たちの人生の旅路と重ねて考えることが出来るということでした。いわゆるアナロジー（類比）です。ローマに向かう船の中にパウロが乗っていたことで嵐に出会った時にも乗客たちは混乱せず、船員たちにも身勝手な行動をさせないで一つ心になって船の難破に備えることが出来、全員の命が助かりました。パウロの指導と励ましの言葉があったからこそ全員が無事に島に辿り着けたのでした。このことは、その船（＝人生）に誰が乗っているかということ、嵐の時（＝人生の苦難や困難）の対処の仕方も違っているということ、を類比して読み替えられたのでした。

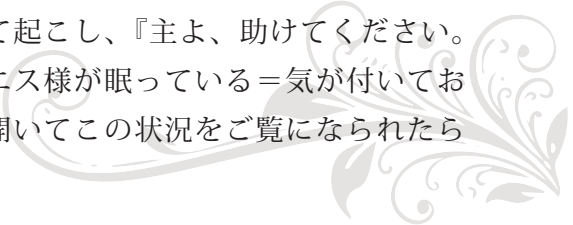
また、その使徒言行録の後に読み始めているのが旧約聖書の「ヨナ書」です。このヨナ書にも「船旅」が登場します。預言者ヨナは「ニネベに行け」という神様の命令に背いて、自らの意志で船に乗って逃げたのでした。しかしその船に嵐が襲い掛かりました。この場合はパウロとは全く逆で、ヨナがその船の中にいるために船が難破しそうになったのです。そして、ヨナが海に投げ出されると嵐は止み、海はおだやかになったのでした。その船（＝人生）に誰が乗っているかがとても重要であることを、この二つの船旅は教えています。

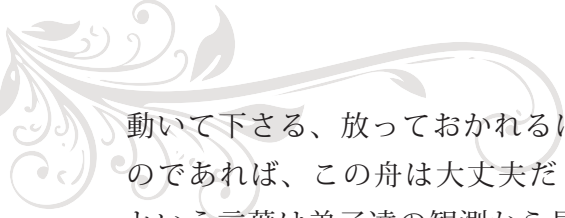
## 2、イエス様と弟子達の船旅

今日の箇所は、イエス様と弟子たちが船に乗ってガリラヤ湖を渡られた場面です。これも船旅です。そしてその船も「湖に激しい嵐が起こり、舟は波にのまれそうになった」のでした。これもいくつかのアナロジーで読まれて来ました。教会と類比されたり、この世界の状況と類比されたり。

本日の礼拝は新年最初の礼拝ですから今日はこの船旅を私たちこの一年の歩みと捉えてみたいと思います。その際、何と言っても考えさせられる点は、ここでイエス様が一緒にいて下さるのに「嵐が起こる」という点です。先ほど触れましたように、船に「誰が乗っているか」という点が大事だったはずですが、ここにイエス様が居られるのです。そうであるのに、嵐（＝人生の苦難や困難）は起こって来るのです。逆に言えば、これを持てば家内安泰、災禍を防げるというものが「信仰」ではないということでしょう。イエス様と一緒に歩んでいても人生に困難や問題は降りかかってきます。なぜこんなことと思うような事が。そういう時人はどう考えるでしょう。

ここでは「イエスは眠っておられた。弟子たちは近寄って起こし、『主よ、助けてください。おぼれそうです』と言った」のでした。つまり、彼らはイエス様が眠っている＝気が付いておられないと考えたのです。もし、イエス様がちゃんと目を開いてこの状況をご覧になられたら





動いて下さる、放っておかれるはずがないと。しかし、本当はイエス様が「眠っておられた」のであれば、この舟は大丈夫だということだったのではないのでしょうか。「おぼれそうです」という言葉は弟子達の観測から見たことでありました。そのことが次のイエス様の言葉に表れています。「イエスは言われた。『なぜ怖がるのか。信仰の薄い者たちよ。』」です。他の福音書では『まだ信じないのか』、『信仰はどこにあるのか』と言われたとあります。いずれにしる弟子達の信仰の無いことを指摘しておられます。その通りでしょう。私たちも人生の困難や災いに囲まれた時は大変だと大騒ぎをし、一刻も早くこの状態から脱したいとあせります。すぐ事態が好転しないと何もかもがダメになってしまうと思ひ込むからです。

もちろん、私たちのピンチにはイエス様がその御力を発揮してくださいます。ここでも、弟子達の信仰の無さに問題を感じられながらも、その『主よ、助けてください』という彼らの声に答えてイエス様は「起き上がって風と湖をお叱りになると、すっかり凪になった」のでした。苦しい時の神様頼りの叫びや祈りにちゃんと答えてくださるのは确实であり、そのまま信じるに足ることです。しかし、もう少し私たちは自分たちと一緒にイエス様が居てくださるということに信頼と確信を持つものでありたいと思います。それこそが「信仰」ではないかと。それ故、困難な状況にあってもなお神様の助けと導きを待つこともできるようになると思います。信仰は私たちに「待つ力」を授けてくれるものです。

### 3、「この方から」

昨年末のクリスマス礼拝の時に、使徒言行録 26 章 19 節以下とエフェソの信徒への手紙 5 章 8 節以下のみ言葉から礼拝を献げました。そのエフェソ書 5 章 9 節に「光から、あらゆる善意と正義と真実とが生じるのです」というみ言葉がありました。この「光」こそイエス様であること、そしてこの「光」が私たちの元に来られた時がクリスマスであることを覚えました。

今、この一年を始めるあたり、ここに集う誰もが「善意と正義と真実」を為そうと思っています。キリスト者であるならば、そう思わない人はいないと思います。しかし、そう思い定めてこの一年を生きて行ったとしても「善意と正義と真実」を為し切れない現実も在り、またその志を続けられない状況も生じて来るだろうということも事実でしょう。しかし、その時こそ本当に「信仰」が問われるのかもしれない。

「光から、あらゆる善意と正義と真実とが生じるのです」というみ言葉は「あらゆる善意と正義と真実とが生じる」のはあくまで「光から」なのだという真実を私たちに告げてくれています。私たちの中から生まれて来るものではないのです。逆に言えば、私たちの持つ「善意と正義と真実」はたかが知れているのです。イエス様から与えられなくては善意と正義と真実はないのです。仕事や子育て、介護や援助、社会奉仕などすべての善意ある行動や正義と真実を求める活動は、この「光から」生じて来るものです。このこと抜きに善意と正義と真実を求めてもすぐに枯渇するのです。

今日のみ言葉のように、これから「嵐」の只中に放りこまれることもあるかもしれません。行く先が「嵐」であると分かっているにも敢えて舟を漕ぎ出さなければならない時もあるかもしれません。そのような厳しい状況を生き抜くことで戦い疲れ、とても善意と正義と真実など保てない、擦り切れてしまったと感じる時もあるでしょう。そのような時こそここに立ち戻り、イエス様から発する「善意と正義と真実」を新しく与えられる必要があるのです。それぞれこの世の嵐の中を生き抜いて行くために。

